かさじぞう

むかしむかし、貧乏だけど心優しい、おじいさんとおばあさんがいました。

12月のある日、おじいさんとおばあさんは、二人でかさを作りました。それを町で売って、お正月のおもちを買うつもりです。

大晦日、おじいさんは笠を売りに町へ出かけましたが、ひとつも売れませんでした。雪がたくさん降ってきたので、おじいさんは笠を売ることをあきらめて、家に帰ることにしました。

帰り道、おじいさんは6体のお地蔵さまを見つけました。お地蔵様には雪が積もっていて、とても寒そうです。

「お地蔵様。こんなに雪が積もって、寒いでしょう。この笠をかぶってください。」

そう言って、おじいさんは売るはずだった笠をお地蔵様の頭にかけてあげました。ところが、おじいさんはかさを5つしか持っていなくて、1つ足りません。そこでおじいさんは自分のかぶっていた手ぬぐいもかぶせてあげました。

その晩、ズシン、ズシンという音が遠くから聞こえてきました。おじいさんとおばあさんは、窓から外をのぞきました。

すると、雪の中を、笠をかぶったお地蔵様が重そうな荷物を引っぱりながら歩いてきます。一番後ろのお地蔵様はおじいさんの手ぬぐいをかぶっていました。

「親切なおじいさんの家はどこかな。笠をかぶせてくれてありがとう。」

音はだんだんと大きくなって、おじいさんの家の前まで来ました。お地蔵様は大きな荷物を置いて、帰っていきました。

おじいさんとおばあさんが家の外に出ると、そこには米俵が六つ置いてありました。こうして、二人は楽しいお正月をむかえることができました。

「ゆづり葉」

子供たちよ。
これはゆづり葉の木です。
このゆづり葉は
新しい葉が出来ると
入り代わって古い葉が落ちてしまうのです。

こんなに厚い葉
こんなに大きい葉でも
新しい葉が出来ると無造作に落ちる
新しい葉にいのちをゆずって――。

子供たちよ
お前たちは何をほしがらないでも
すべてのものがお前たちにゆずられるのです
太陽のめぐるかぎり
ゆずられるものは絶えません。

かがやける大都会も
そっくりお前たちがゆずり受けるのです。
読みきれないほどの書物も
幸福なる子供たちよ
お前たちの手はまだ小さいけれど――。

世のお父さん、お母さんたちは
何一つ持ってゆかない。
みんなお前たちにゆずってゆくために
いのちあるもの、よいもの、美しいものを、
一生懸命に造っています。

今、お前たちは気が付かないけれど
ひとりでのいのちは延びる。
鳥のようにうたい、花のように笑っている間に
気が付いてきます。

そしたら子供たちよ。
もう一度ゆづり葉の木の下に立って
ゆづり葉を見るときが来るでしょう。
いく 一行の詩

去年の木

いっぽんの木と、いちわの小鳥とはたいへんなかよしでした。小鳥はいちんちその木の枝で歌をうたい、木はいちんちじゅう小鳥の歌をきいていました。

けれど寒い冬がちかづいてきたので、小鳥は木からわかれてゆかねばなりませんでした。

「さよなら。また来年きて、歌をきかせてください。」と木はいいました。

「え。それまで待っててね。」と、小鳥は行って、南の方へとんでゆきました。

春がめぐってきました。野や森から、雪がきえていきました。

小鳥は、なかよしの去年の木のところへまたかえっていきました。

ところが、これはどうしたことでしょう。木はそこにありませんでした。根っこだけがのこっていました。

「ここに立ってた木は、どこへいったの。」と小鳥は根っこにききました。

根っこは、「きこりが斧でうちたおして、谷のほうへもっていっちゃったよ。」といいました。

小鳥は谷のほうへとんでいきました。

谷の底には大きな工場があって、木をきる音が、びんびん、としていました。

小鳥は工場の門の上にとまって、

「門さん、わたしのなかよしの木は、どうなったか知りませんか。」とききました。

門は、「木なら、工場の中でこまかくきりきざまれて、マッチになってあっちの村へ売られていったよ。」といいました。

小鳥は村のほうへとんでいきました。

ランプのそばに女の子がいました。

そこで小鳥は、「もしもし、マッチをごぞんじありませんか。」とききました。

すると女の子は、

「マッチはもえてしまいました。けれどマッチのともした火が、まだこのランプにともっています。」

といいました。

小鳥は、ランプの火をじっとみつめておりました。

それから、去年の歌をうたって火にきかせてやりました。火はゆらゆらとゆらめいて、こころからよろこんでいるようにみえました。

歌をうたってしまうと、小鳥はまたじっとランプの火をみていました。それから、どこかへとんでいってしまいました。

雨ニモマケズ

宮沢賢治

雨にも負けず
風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けぬ
丈夫なからだをもち
慾はなく
決して瞋いからず
いつも静かに笑っている
一日に玄米四合と
味噌と少しの野菜を食べ
あらゆることを
自分を勘定に入れずに
よく見聞きしわかり
そして忘れず
野原の松の林の陰の
小さな萱ぶきの小屋にいて
東に病気の子供あれば
行って看病してやり
西に疲れた母あれば
行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば
行ってこわがらなくてもいいといい
北に喧嘩や訴訟があれば
つまらないからやめろといい
日照りの時は涙を流し
寒さの夏はおろおろ歩き
みんなにデクノボーと呼ばれ
ほめられもせず
苦にもされず
そういうものに
わたしはなりたい

※原文の片仮名を平仮名に改め、一部の語句を漢字で表記しています。